

庶務幹事この一年

東京大学物性研究所 高橋敏男

一年経つのは早いもので、今年も定年退官される教官の記念行事や春の学会を迎える季節になってしまった。石井先生から放射光学会の庶務幹事役を依頼されたのは、物性研の所員退官記念パーティ会場であったと思う。アルコールも入っており、気軽に引き受けてしまった。ところがよく考えると、庶務幹事は何をするのか、また学会がどのように運営されているのか全くと言っていいほど見当がつかない。よく聞いてみると、庶務幹事は一番大変であり、実際、前任の大隅さんは、若手会員、学生会員を優遇するための定款の改定や、国際会議などの主催、共催の内規づくりなど実務的な仕事でたいへんご苦労されたとのことである。しかし、一方では、学会の運営が軌道に乗り順調なときにはそれほど大変でもないとも聞いた。

この一年をふり返ってみると、幸いなことに後者であったようである。というのは、会長および各幹事の集まる「幹事会」(会誌にも、その会の報告が掲載されている)において、かなり時間を割いて議論したことは、「幹事会」というものは定款には明文化されておらず、それをどのように位置づけ、定款に反映させるかということであった。詳しいことは、おそらく石井前会長の記事に載ると思われるので、これ以上触れないことにする。このようなことが議論され始めたということは、とりもなおさず学会の運営スタイルが固まり、学会としての軌道に乗ったことを意味している。これは、これまでの会長、幹事、評議員の方々の努力の賜物である。

この一年の間に、「中型放射光施設計画に関する調査報告書」が前年の大型放射光に関する調査報告書のあとを受けてまとめられた。これらをまとめることは、本学会が果たすべき重要な使命の一つであり、それらを終え一段落したという意味においても、本学会は新たな時期を迎えたといえよう。とはいえ、学会を支える基盤である会員を増やす努力は絶えず行う必要があり、本年度は、学会案内のパンフレットを渉外委員会で作成し、適当な場所で配布を行っている。また、無料で会員名簿を配布した。

学会と会員とのおもな接点は、会誌と年会である。会誌「放射光」は、編集関係者の継続的な努力により毎号充実したものになり、学会誌の多くは会員の手が届いても少し古くなるとごみ箱に捨てられる運命にあるにもかかわらず、「放射光」だけはいつまでも本棚にとどまるのではあるまいか。本学会は、さまざまな分野の研究者等の集まりであるところに特徴があり、また特殊性がある。その意味で、年会の他の催し物をどのように企画するか今後ますます行事委員会の果たす役割が大きくなろう。

以上、この一年を振り返りとりとめのないことを記したが、庶務の仕事を通していろいろ勉強する機会を与えて頂いた会長、並びにたいへんお世話になった各幹事の方々にお礼申し上げます。また、事務局の西野さん、大森さんのご支援なくしては庶務幹事は務まらず厚くお礼申し上げます。

会計幹事この一年

高エネルギー物理学研究所 飯田厚夫

一年の感想にかえ、この紙面をお借りして、'91年度の決算報告(本誌「会告」をご参照下さい)についてのコメントを述べさせていただきます。

これまでの会の運営にたずさわられた皆様の御努力により、黒字(約118万円)の状態で会計を引き継ぎましたが、昨年度もこれまでの会計の方針通り、会の財政基盤を確立するために、収入増を計り黒字を増加させるべく皆様のご協力をいただきました。そのため、賛助会員(72社)の増加並びに口数の増加のお願いや広告収入の増加を試みましたがこの方面の収入は微増にとどまりました。

本年度の収支に大きな影響のあった、そして予算とのずれの大きかったのは以下の3つです。1番目は会誌「放射光」Vol.4, NO.3において中型放射光の調査報告書を掲載したことと、その別刷りを関係各機関を始めとして購入していただいたことです。この号の出版費用は通常号の約2倍かかりましたが、一方別刷り販売による収入は約280万円であり、通常号出版費用との差額を考えると、約130万円の黒字となりました。

2番目としては、会員名簿出版に関わるものです。昨年度は2年毎の会員名簿の発行年に当り、

名簿を会員の皆様に送付いたしましたが、予算では出版費用はほぼ広告料とバランスをとれるものと考えておりました。しかし、会員リストの作成と確認に予想以上(予想100万円にたいして約133万円の執行)の出費がかかったことと、広告収入が予定より少なかったことにより、約70万円の赤字となっています。本学会の財政規模から考えますと、会員名簿の発行方法あるいは発行周期を再検討する必要があるかと思えます。

3番目としては、会員増のための学会紹介パンフレットの作成・配布があります。これには約34万円かかりました。

以上が'91年度決算において大きな影響を与えた費目ですが、他の日常的な支出項目も微増しており、結局予算書に示されておりますように、昨年度の収支は103,099円と僅かながら黒字となりました。今後も本学会の財政基盤を確立するために、支出を抑制するとともに、収入源の柱を開拓する必要性を感じています。最後になりましたが、会計幹事として何とか一年過ごせたのは、事務局の西野さん、大森さんのご協力によるものであり、深く感謝いたします。



1991年度幹事報告

編集幹事この一年

筑波大学物理工学系 大嶋建一

前年度に引続き幹事を務め、委員の方々と共に学会誌“放射光”をVol.4, No.2からVol.5, No.1まで発行しました。解説・トピックスおよび実験技術に関しては各執筆者の力作を掲載することが出来ましたので特にコメントする必要はありません。従ってここではそれら以外の記事の中で特徴あるものを述べてみます。

その1としては中型放射光施設計画の報告書(Vol.4, No.3)です。前年度の大型計画の報告書と一対となるもので、今後の進展をぜひ見守りたいものです。その2としては“加速器を操る人たち”という題の座談会(Vol.5, No.1)が佐々木委員の努力で実現しました。日頃放射光を利用する立場にあるものにとっては放射光を作る大切な部分を知るよい機会を得たと思っています。その3としてKEKの安藤さんからの若手会員増のための提案の一部が実行されたことです。Vol.5, No.1には

2名の新博士の紹介がありました。今後学位を修得した会員の方(入会希望者も含む)がおりましたら、学会事務局に報告して下さい。その4として同歩放射、同期輻射という欄を作り、千川・冨家両先生に随筆を執筆していただいています。長年の経験と独自の主張の中には得るものが多く、次号の記事をそわそわしながら待っています。その5としてKEKの宮原さんによる“放射光基礎講座”が開講しました。大学生・大学院生向けの教科書作りを目ざして、ぜひ毎号執筆して下さい。期待しています。

会誌は全会員の最も重要な情報伝達のもので、より有効な利用のための皆様の御意見をどしどし編集委員会にお寄せ下さい。若手を中心に構成されています委員会ではその提案を実現するための対応は常に出来ています。

1991年度幹事報告

行事幹事この一年

東京大学工学部 石川哲也

編集幹事の筑波大大嶋先生から本稿の執筆依頼状なるものを頂いてから、行事幹事として何をしたらか考えてみたが、正直に言って何もしていな

い。年会は東北大学の佐藤繁先生をはじめとする現地の強力な実行委員会のもとで着々と準備が進んでいるし、例年続いてきたシンポジウムも今年

は行われなかった。昨年の春に前行事幹事の日本電気(株)水木氏から「日本放射光学会」の行事幹事を引き継いだ時に、これは大変なことになったと思っていたら、あまり日を置かずして筑波大の福谷先生から「PFシンポジウム」実行委員長なるものの引き継ぎが行われ、「かなり」のパニック状態に陥ってしまった。それでも、その頃には11月前半のPFシンポジウムが終ってから放射光学会のことを考えれば良いと甘く考えていたが、チェスターでのSRI-91から帰ってきた直後の8月の或日に、大事件が勃発して11月に予定されていたPFシンポジウムを1月初旬まで延期せざるを得なくなった。かくしてパニックの程度は「かなり」から「おおいに」に進展した訳であるが、「PF懇談会」行事委員として、電総研大柳委員長のもとで開催された「放射光基礎技術講習会」に引っ張り出されて「完全な」パニック状態が完成した。これら全てのしわ寄せが放射光学会に来てしまったことを深くお詫びしたい。

昨年度のこの欄で水木氏が他学会の主催する催し物との差別化に言及しているが、特にPFシンポ

ジウム等の個々の施設のユーザーズミーティングと放射光学会の年会とにどのような性格付けをするかは今後とも重要な課題になると考えられる。今年はまだPFシンポジウムにも関わって、PFシンポジウムと放射光学会年会の位置付けや、PF懇談会と放射光学会の関係に関していくつかの御意見を伺った。その中で代表的なものは、PF懇談会（PFシンポジウム）はPF固有の問題を扱い、放射光学会（年会）は放射光科学に横断的な問題を扱うべきであるというものであるが、果して固有の問題を捨て去ったところに横断的な問題がどれだけ残るだろうか。むしろ、各施設に固有な問題をぶつけあってその中から横断的な問題を抽出する場としての放射光学会に期待したい。

最後に、この1年間の行事委員を紹介し、紙面をお借りして感謝の意を表したい。

磯山悟朗（分子研）、伊藤健二（高エ研）、佐藤繁（東北大）、辛埴（物性研）、春日俊夫（広島大）、柳原美広（東北大）、水木純一郎（日本電気）、百生敦（日立製作所）（敬称略）

1991年度幹事報告

渉外幹事この一年

東京大学物性研究所 柿崎明人

第四期渉外幹事としての一年が過ぎた。「庶務幹事は大変だけど他は比較的楽だから、二年間続けるのが、学会の伝統だ。」と言われて2年間やってしまった。しかし、考えてみると設立してから間もないのだから伝統なんてもともとなかったのだ。ともかく、今はこれで終わってホッとしている、というのが本当の気持である。

年度の始めに、一年間渉外としてやらなければならないことを挙げて、活動計画を出したのだが、それも十分に出来たとは言えない。本年度に行ったことのうち、この場を借りて二つのことを報告したい。

まず、前回もこの欄で書いた Synchrotron Radiation News の件である。会員であるのに送られて

こないという苦情を沢山いただいた。発行元に手紙を書いたが、その後も苦情をいただいた。

こちらの言っていることが通じていない。そこで、学会の新しい名簿が11月に出来ることでもあり、それに従って送ってくれるようたのむことにして、7月に英国で開かれた SRI'91 に来ていた Brandi 氏と Lord 嬢に再度直接おねがいをした。後日、新しい名簿を日本支局にも送り、それに従って送ってくれるよう再々度おねがいをした。今度こそ約束は守られるものと思っている。

もう一つはパンフレットである。放射光学会は昨年学術会議に登録されたが、そこに送る学会の代表は数の力で決まる面があり、会員増を企めることは、渉外の大事な問題でもある。本年度は、

会員の拡大のために、学会紹介のパンフレットを作った。すでに手に取ってごらんになった方もおられると思うが、アンジュレータ放射のカラー写真が美しいもので、これを見て会員になってくれる人が多くなることを祈っている。アンジュレータ放射の写真を提供していただいた佐々木先生、いろいろな最新の実験結果を心良くお貸しいただいた渉外委員の皆様には心からお礼を申し上げたい。

この2年間、事務局の西野、大森両女史には本当にお世話になった。いつも幹事の手となり口となり、時には幹事以上にいろいろな交渉事もやっていただいた。今、ホッとされているのもお二人のおかげである。

高輝度光源の愛称とシンボルマークを公募します

東京大学物性研究所の軌道放射物性部門と同研究施設では、軟X線から遠赤外線にわたる広い波長領域の放射光を発生させる高輝度光源を新たに設置することを計画しています。新光源は、アンジュレータを主体にした最大電子エネルギー1.5GeVの低エミッタンス電子ストレージリングです。偏向電磁石からの通常の放射光のほかに各種アンジュレータからの円偏向を含む高輝度かつ波長可変の単色放射光を物性研究に利用することができます。新光源からの放射光は広く内外の研究者の共同利用に供されることとなります。今後、この計画を多くの皆様に知っていただき、具体化し、推進していくために新光源リングの愛称とシンボルマークを公募することになりました。

新リングにふさわしい愛称とシンボルマークを、由来をお書き添えのうえお寄せください。

宛先 〒160 東京都港区六本木7-22-1

東京大学物性研究所軌道放射物性部門内 シンボルマーク係

締切 7月31日